

①「江別」

えべつし とんでんへい にゅうち かいたくし えべつむら せっち
江別市は、屯田兵が入地し開拓使が江別村を設置した
めいじ ねん がつ にち か い き
明治11(1878)年10月5日を開基とします。

めいじ ねん えべつとんでん こ にゅうち しのつとんでん
明治11年の江別屯田10戸の入地に始まり、篠津屯田
のっほろとんでん とんでんへい にゅうち ほくえつしょくみんしゃ
や野幌屯田に屯田兵445 戸が入地し、北越殖民社など
かいたくしゃ とりよく はってん つづ
の開拓者の努力によって発展を続けています。

えべつし いしかりへいや ちゅうしん い ち にほん ばんめ
江別市は、石狩平野の中心に位置し、日本で4番目の
てつどう かいつう いしかりがわ しゅううん はったつ こうつう うんゆ
鉄道の開通や石狩川の舟運の発達など、交通運輸の
ようしょ
要所でした。

めいじじだい ようぎょう せいしぎょう か
いま、明治時代からの窯業・製紙業に代わり、
しょくひんかこう のうちくさん くわ ぶんきょうとし さら
食品加工や農畜産などに加え、文教都市として更なる
はってん め ざ
発展を目指しています。

げんしりん いしかりがわ
そして、原始林と石狩川にいだかれたふれあいのまち
め ざ
を目指しています。

もんしょう し き
②「紋章と市旗」



ほんし かいたく ほくもんけいび とんでんへい
本市の開拓は北門警備の屯田兵を
はいち はじ
配置せられたるに創まる。

ゆえ わ りくぐん せいしょう とんでんへい
故に我が陸軍の星章をもって屯田兵
ひょうげん しゅうい えんけい つき かたち あさ
を表現し周囲の円形は月を象とり朝

ほし いただ い ゆう あお かえ きんろう い
に星を戴きて出で夕べに月を仰いで帰れる勤労の意を
きねん とも かこ えべつ かしらもじ せいしょう くば
記念すると共にこれを囲む。江別の頭文字は星章を配
ま いっちわきょう み あ い ひょうじ
り巻きて一致和協の実を挙げるの意を表示せるものと
する。

えべつしもんしょう せいてい たいしょう ねん がつ にち
【江別市紋章 制定 大正13年10月24日】



しみん もんしょう せんじん でんとう
市民の紋章は先人の伝統を、それを
かこ もよう しみん あら しみん て
囲む模様は市民を表わし、市民が手を
でんとう けいしょう
とりあって伝統を継承することと、

もんしょう えん もよう えん ひろ みらい む
紋章の円と模様の円との広がり、未来に向かって
ひやく むげんせい ひょう
飛躍する無限性を表す。

えべつしき せいてい しょうわ ねん がつ にち
【江別市旗 制定 昭和43年5月25日】

めいじ たいしょう
③「明治から大正へ」

めいじ ねん がつ にち えべつむら せっち
明治11(1878)年10月5日に江別村が設置されてか

めいじ なか たすう とんでんへい かいたくみん いじゅう
ら明治の中ごろまでに、多数の屯田兵や開拓民が移住し

ほろないてつどう かいつう いしかりがわ しゅううん はったつ
ました。幌内鉄道の開通、石狩川での舟運の発達や

れんがこうじょう つく しだい まち すす
煉瓦工場なども作られ、次第に町づくりが進められてい

きました。

めいじ ねん えべつ ついしかり しのつ さんそん
明治39(1906)年には、江別・対雁・篠津の三村が

がっぺい きゅう ちょうそんせい えべつむら ふじせいし
合併して 2 級 町村制 の江別村となり、富士製紙

えべつこうじょう かいぎょう でんとう ぷきゅう まち かっき う
江別工場の開業、電灯の普及などにより町に活気が生

のうさんぶつ しゅうかち ほってん たいしょう
まれ、農産物の集荷地としてより発展し、大正5(1916)

ねん じんこう にん かぞ えべつちょう
年には人口16,732人を数え江別町となりました。

⑤「戦後の江別」

しょうわ ねん こだじまくんべい し はつ こうせん
昭和22(1947)年に古田島薫平氏が初の公選による
ちょうちょう ほんかくてき せんご ふっこう はじ
町長となり、本格的な戦後の復興が始まりました。
おうじこうくうきかふしきがいしゃ きたにほんせいし さいけん だい
王子航空機株式会社は北日本製紙として再建され、第1
ちゅうがっこう かいこう まち かっき
～3の中学校が開校して街に活気があふれていました。
しょうわ ねん がつ どう しょうしつ たいか
昭和28年5月には 227棟を焼失する大火もありまし
ひきあげしゃ りゅうにゅう じんこう
たが、引揚者の流入などにより人口が34,359人とな
しょうわ ねん がつ えべつし とし
った昭和29(1954)年7月に江別市となり、都市として
あゆ はじ
歩み始めました。

しょうわ ねん おおあさだんち きこうしき
昭和39(1964)年には大麻団地の起工式が行われ、こ
ぜんご だいがく かいがく どうりつとしょかん きょういくけんきゅうしょ
れと前後して大学の開学、道立図書館・教育研究所な
せつりつ ぶんきょうがくえんとし きのう そな
どの設立もあり、文教学園都市としての機能も備えてい
きました。

しょうわ ねん かいぎひゃくねん えべつし
昭和53(1978)年に開基百年をむかえた江別市は、
へいせい ねん じんこう まんにん こ どうおうけん
平成2(1992)年には人口10万人を超え、道央圏の
ちゅうかくとし
中核都市となりました。

ど き う つ か
⑥「土器の移り変わり」

え べ つ ひ と す は じ ねんまえ
江別に人が住み始めたのは、今から 8500年前の

じょうもんじだい そうそうき
縄文時代草創期のことです。

まんねんまえ しこつかざん ふんか かさいりゅう つく
4万年前の支笏火山の噴火による火砕流で作られた

のっぽろきゅうりょう ゆた みの あた だいち おお
野幌丘陵は、豊かな実りを与える大地となり、多くの

さわ しゅうい あんてい せいかつ ばしょ いせき
沢の周囲には安定して生活できる場所としての遺跡が

かずおお のこ
数多く残されました。

はっけん いせき かしょうじょう
これまで発見された遺跡は 140カ所以上となり、そ

いせき じょうもんじだい さつもんじだい ひと
れらの遺跡からは、縄文時代から擦文時代にかけての人

せいかつ し て が はっけん
びとの生活などを知る手掛かりが発見されています。

い せ き む ら き ゅ う と よ ひ ら か は ん い せ き
⑦「遺跡の村（旧豊平河畔遺跡）」

き ゅ う と よ ひ ら か は ん い せ き ち ゅ う お う な が き ゅ う
旧豊平河畔遺跡の中央には、長さ 300m ほどの旧
と よ ひ ら が わ ち い か わ か わ か こ
豊平川にそそぐ小さな川があります。この川を囲むよう
ね ん ま え む ら
に 1700年前の村がありました。

あ な し ゅ う き ょ ち ょ っ け い ぜ つ じ ょ う で い り ぐ ち
たて穴住居は、直径 10mほどで舌状の出入口のあ
ち ょ っ け い こ が た え ん け い
るものと直径 4mほどの小型で円形の二つのタイプが
あ り ま す 。

む ら な か ほ ん は し ら や く ほ う け い は い ち
この村の中には、9本の柱を約6m方形に配置した
そ う こ な や む ら ほ ち
倉庫か納屋もあります。そして村のまわりには、墓地在
あ り ま し た 。

⑧「江別式土器の広がり」

稲作いなさくの伝来でんらいとともに生まれた弥生文化やよいぶんかは、南みなみから
北ほくしょう上とうほくちほうし東北地方たっに達しました。しかし、寒冷地かんれいちの北海道ほっかいどう
には稲作いなさくは伝わらず、鉄器てつきの使用しょうなど弥生文化やよいぶんかの影響えいきょう
を受けながら、縄文文化じょうもんぶんかを受け継ぐ生活うの形つが続きま
した。これを北海道独特ほっかいどうとくとくの縄文文化そくじょうもんぶんかと呼びます。

北海道北東部ほっかいどう ほくとうぶに興津・下田ノ沢おこつ しもたのさわの宇津内文化うつないぶんかが、
南西部なんせいぶには本州ほんしゅうの影響えいきょうが強い恵山文化つよ えさんぶんかが広がり、
地域ちいき的な差さが生まれました。それぞれの文化ぶんかで特色とくしょくの
ある型式かたしきの土器どきを使用しょうしていましたが、やがて、その
中間ちゅうかんにあった道央どうおうで江別式土器えべつしき【後期北海道式薄手こうき ほっかいどうしき うすて
縄文土器じょうもんどき（後北式土器こうほくしきどき）】が生まれ、それが北海道全域う、
さらに北は樺太きた からふと、南は東北地方南部みなみ とうほくちほう なんぶまで広がっていき
ました。

えべつしきどき

⑨「江別式土器」

どうなんぶ えさんしき どき どうほくとうぶ おこつ しもたのさわしき
道南部の恵山式土器と道北東部の興津・下田ノ沢式
どき とくちょう あ どき せいき
土器との特徴を合わせもった土器。4～7世紀ころまで
つか もんよう しきどき さいぶん さいせいき
使われ、文様によりA～D式土器に細分される。最盛期
しきどき ほっかいどうぜんいき ちしま からふと
のC2式土器は、北海道全域だけでなく千島・樺太、そ
とうほくちほう にいがたけん
して東北地方・新潟県までもひろがっています。

さいしょぎじょうはりつけもん もよう だんめんさんかけい せんじょう
最初擬縄貼付文だった模様も断面三角形の線状な
びりゅうきせん ちよくせんてき もんよう さんかく ひしがた かど まる
微隆起線となり、直線的な文様や三角・菱形から角の丸
もんよう へんか かたち とっき
い文様へと変化しており、その形も突起をもつものか
ちゅうこうつ みみつ さまざま かたち どき あらわ
ら注口付きや耳付きなど様々な形の土器が現れまし
た。

どき ほんしゅう はしき すえき
やがてこの土器は、本州で作られた土師器・須恵器の
りゅうにゅう しょうめつ さつもんじだい すす
流入により消滅して、擦文時代へと進んでいきます。

えべつぷといせき りょうば
⑩「江別太遺跡のサケ漁場」

えべつぷといせき いしかりがわ ちとせがわ ごうりゅうちてん
江別太遺跡は、石狩川と千歳川の合流地点から3km

じょうりゅう ちとせがわ うがん かわ わんきよくぶ くい う
上流の千歳川の右岸にあります。川の湾曲部に杭が打

こ ないぶ たすう ほね み
ち込まれたテシの内部からは、多数のサケの骨が見つ

もり ぼう はっけん
りました。また、ヤスや銚、サケたたき棒なども発見さ

ねんまえ りょうば かんが
れ、1700年前のサケの漁場と考えられています。

えべつぷといせき きゅうとよひらかはんいせき ねんだい いっち
江別太遺跡と旧豊平河畔遺跡の年代が一致しており、

とうじ ひとびと せ た とよひらがわ いしかりがわ とお ちよくせんきより
当時の人々は世田豊平川や石狩川を通ったり、直線距離

りくろ とお おお
にしてわずか5kmほどしかない陸路を通り、サケの多く

と しょか ばんしゅう りょうば りょう
獲れる初夏から晩秋にかけてこの漁場を利用していた

かんが
と考えられています。

⑪「北海道式古墳」

こふんじだい な ら へいあんじだい にほんしよき
古墳時代から奈良・平安時代にかけて、日本書紀や
そくにほんき ぶんけん えみし こうりゅう しょけん
続日本紀などの文献に蝦夷の交流が所見されます。こ
とうじ とうほくちほう こがた えんぶんぐん ぐんしゅうぶん よ
の当時、東北地方には小型の円墳群（群集墳とも呼ば
かすおお そうえい えべつ とうほく
れる）が数多く造営されています。江別にもこの東北
ちほう まっきこふん おな こうそう はか つく
地方の末期古墳と同じ構造の墓が作られました。これら
ほっかいどうしきこふん えべつ えにわ すう しょ
は「北海道式古墳」ともよばれ、江別や恵庭など数か所
はっけん えべつ こふんぐん ほっかいどう げんぞん
で発見されました。江別の古墳群は、北海道で現存する
ゆいいつ こふん くにしてい しせき ほ こ
唯一の古墳として、国指定の史跡として保護されていま
す。

こんかいのはっけん こふん ふくそうひん ほんしゅう つく
今回発見された古墳の副葬品のほとんどは本州で作
もの しゅつど は じ き けいしき わらびてとう つく
られた物で、出土した土師器の形式や蕨手刀の作り、こ
つた じかんさ じだいはいけい
こまで伝わってきた時間差や時代背景などにより、8
せいきこうはん せいきぜんはん ほっかいどう さつもんじだいぜんはん
世紀後半から 9世紀前半、北海道では擦文時代前半に
こうちく かんが
構築されたと考えられています。

対雁神社(ついしかりじんじゃ)

松浦武四郎が弘化3年(1846年)8月にツイシカリに立ち寄った際に、番屋の他に弁天社があることを「再航蝦夷日誌」に記しており、この弁天社が対雁神社の前身と考えられています。対雁村史によると、この弁天社のご神体は、長さ2尺(約60cm)×直径3寸(約10cm)のヒスイ色をした柱状の天然石です。江戸時代に鮭漁請負人山田文右エ門の引き網にかかり石狩川で見つかりました。三度も網にかかったのも、これは偶然ではなく神の行いであると考え、祠に祀ったそうです。

明治9年(1876年)に樺太アイヌが対雁に移住した後、開拓使の役人だった上野正の発意で、この弁天社を修復し、鳥居を新設してアイヌの人々の氏神としました。弁財天は、古来より航海に携わる人々の守り神として信仰されてきたことから、多くのアイヌの人々に知られていました。弁天社はその後「対雁神社」と呼ばれるようになります。

対雁神社は、旧豊平川の河口付近(現在の榎本公園の対岸)にありましたが、昭和46年(1971年)9月、旧豊平川の治水工事のため解体されました。

現在は、榎本公園の中にある「対雁百年碑」に、御神体の石が納められています。



⑫「古文書からみた江別」

17世紀になると松前藩による支配が広がり、18世紀の場所請負制度によるアイヌ使役は過酷になりました。そのため、アイヌと和人との争いが何度も起こりました。江戸幕府は、一時的に直轄支配とするも19世紀初めに再び松前藩が支配することとなりました。

18世紀後半になり、江別もまた場所請負制度により石狩十三場所として和人が入り、ツイシカリに数百人のアイヌが生活していましたが、漁場での酷使や争いごとなどから減少し、江戸時代末期には7軒26人となりました。江別では屯田兵が入地するまで、このような状況であったと考えられますが、アイヌの人びとの生活を知る資料はほとんど残っていません。

江別で生活していたアイヌの遺跡として、対雁にある江別チャシが彼らの文化を示す数少ない史跡の一つとなっています。

えきてい まつ
⑬「駅逓の松」

いしかりがわ こうつうろ じゅうよう はたら
石狩川が交通路として重要な働きをしていたころ、
こ ぬま ま かわ い み
アイヌ語で「沼のある曲がりくねった川」の意味のツイ
じょうりゅう む ちゅうけいてん いしかり じゅうさんばしょ
シカリは、上流へ向かう中継点や石狩十三場所の
りょうば さか ぶんか ねん かみ
漁場として栄えました。文化4(1807)年には上ツシイ
にん
カリに106人のコタンがありました。

けいおう ねん たちばなよしまつ さけりょうば なやもり
慶応3(1867)年には、立花由松が鮭漁場の納屋守と
さいしょ ていじゅうわじん めいじ ねん
して最初の定住和人となりました。明治4(1871)年に
せんたいわくやりょう こ にん にゅうしょく めいじ
は仙台涌谷領から21戸76人が入植しました。明治
ねん からふと いじゅう えきてい
9(1876)年には樺太アイヌが移住し、まもなく駅逓や
こちょうやくば お はんえい
戸長役場も置かれ繁栄しました。

からふと てんねんとう たすう
しかし、樺太アイヌはコレラや天然痘により多数の
びょうししゃ だ いしかり いじゅう ふひと へ
病死者を出し石狩への移住が増えたことにより人が減
ぎゃく とんでんへい にゅうち てつどう かいつう めいじ
り、逆に屯田兵の入地や鉄道が開通したことで、明治
ねんだい まち ちゅうしん えべつむら うつ どうじ
20年代には街の中心は江別村に移りました。当時の
ついしかりむら げんざいかせんしき
対雁村だったところは、現在河川敷となっています。

「駅逓の松」由来

明治14年(1881年)、名越源五郎さんが篠津屯田に入地した際に、父の名越源三郎さんが、故郷の青森県から松毬として持参した赤松の種を庭に蒔いて苗を育て、篠津屯田 20 戸全部に配布した他に、駅逓にも植えたそうです。残念ながら植樹した時期は確定できませんが、当時の駅逓は、小笠原さんという方が管理しており、名越源三郎さんとの御縁もあって駅逓にも植えられたそうです。



駅逓は明治18年(1885)に廃止になりましたが、植えられた赤松は残されて、長い間「駅逓の松」として親しまれてきました。



しかし、昭和49年(1974年)10月24日に、樹齢90年ほどになり枯死寸前で石狩川築堤工事にかかることもあって伐採されました。伐採された切り株については、郵便局・市内の小中学校や希望する市民に配られ、その一つがここに展示されています。

⑭「生活」

ほっかいどう けいび かいたく もくてき とんでんへいせいど めいじ
北海道の警備と開拓を目的とした屯田兵制度は明治

ねん ことにとんでん はじ めいじ ねん
8(1875)年の琴似屯田に始まり、明治37(1904)年の

とんでんへいはいしじょうれい ねんかんつづ えべつ
屯田兵廃止条 例 までの 30年間続きました。江別には

めいじ ねん えべつとんでん こ にん さいしよ
明治11(1878)年の江別屯田 10戸56人を最初とし

めいじ ねん しのつとんでん めいじ ねん
て、明治14(1881)年には篠津屯田、明治18(1885)年

のっほろとんでん にゅうち はじ めいじ ねん こ
の野幌屯田の入地が始まり、明治19年までに445戸

にゅうち はこだてほんせん にしがわ しがいち とんでんへい
が入地します。函館本線より西側の市街地は屯田兵によ

さいしよ かいたく
り最初に開拓されたといえます。

とんでんへい にゅうち こ はんとしちか まいにちくんれん う
屯田兵としての入地後、半年近くは毎日訓練を受け、

こ つき かい くんれん ぐんむ なつば
その後も月3回の訓練などの軍務がありました。夏場の

せいかつ ごぜん じ きしょう じ くんれん かいこん はじ
生活は、午前4時に起床し 6時には訓練や開墾を始め、

ちゅうしょく ひきあげ ご こ じ ふゆば じかん
昼 食 をはさんで引揚は午後6時でした。冬場は 1時間

おそ きしょうごぜん じ ひきあげ ご こ じ
遅く起床午前5時・引揚午後5時でした。

しよくみんしゃ せいかつ
⑮「植民社の生活」

めいじ ねん みしまおくじろう そうせつしゃ
明治 19(1886) 年に三島億二郎を創設者として
にいがたけんながおか せつりつ ほくえつしよくみんしゃ さいしょ おおはしかずそう
新潟県長岡で設立された北越殖民社は、最初、大橋一蔵
ちゅうしん えべつぶと こ にゅうしよく かいこん はじ
を中心に江別太に 10戸が入植して開墾を始め、
しまねけんいわみ こ う い こ えちごむら そうせつ
島根県石見の 7戸を受け入れ 17戸で越後村を創設しま
した。

こ のっほろ とち もと ねん こ にん
その後、野幌に土地を求め 23年までに 135戸632人
いじゅう せきやまござえもん しどう かいたく すす
が移住し、関矢孫左衛門の指導のもとに開拓を進めまし
めいじ ねん こめ しさく はじ めいじ ねん
た。明治24年には米の試作を始め、明治29(1896)年
いなさく せいこう すいがい の び さいがい の こ
稲作に成功します。水害や野火などの災害を乗り越え、
みんかんかいたくだんたい せいこう かすすく じれい のうちかいほう
民間開拓団体として成功した数少ない事例で、農地解放
こ しょうわ ねん かいさん
後の昭和24(1949)年に解散しました。

かいたくしどうしゃ こうせき たた せきやまござえもん やしき
開拓指導者としての功績を称え、関矢孫左衛門の屋敷
あと ちいき ひと せんこえん そうせい にいがたけん
跡を地域の人びとが「千古園」として造成、新潟県の
でんとうげいのう のっほろだいだいかぐら う つ し
伝統芸能を「野幌太々神楽」として受け継ぎ、ともに市
していふんかさい たいせつ ほそん
の指定文化財としていまも大切に保存されています。